

情緒的サポートと認知症発生リスクとの関連：大崎コホート 2006 研究

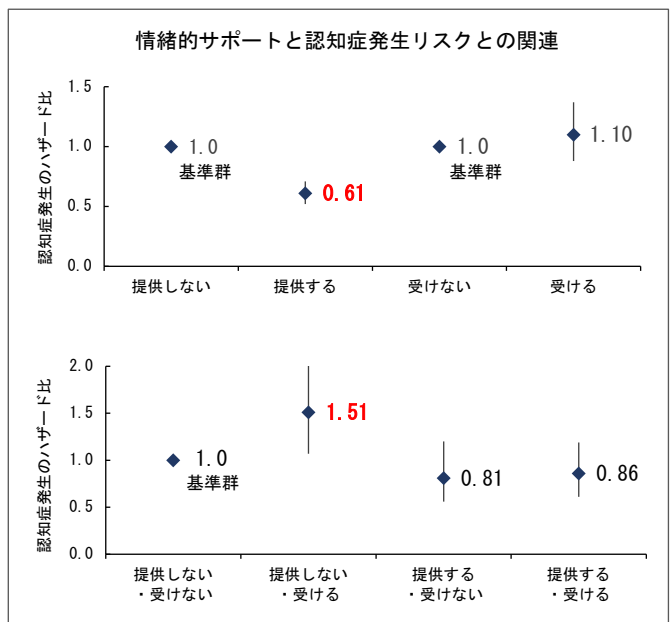
Emotional support (giving or receiving) and risk of incident dementia: The Ohsaki Cohort 2006 Study.

2019 年 Archives of Gerontology and Geriatrics 発表

情緒的サポートを他人に提供する人たちで認知症リスクは低い

先行研究では、情緒的サポートは認知機能低下の予防と関連することが示唆されています。しかし、情緒的サポートが認知症発生リスクに及ぼす影響は明らかになっていません。本研究の目的は、情緒的サポート（提供する・しない、受ける・受けない）と認知症発生リスクとの関連を前向きコホート研究により検証することです。

その結果、情緒的サポートを提供しない群と比べ、提供する群では認知症発生リスクが有意に低下しました。情緒的サポートを受けない群と受ける群との間で認知症発生リスクに有意な差は見られませんでした。さらに「提供しない・受けない」（基準群）と比べ、「提供しない・受ける」群で認知症発生リスクが有意に高くなりました。（図）



研究データについて

本研究は、2006 年に実施した大崎市市民健康調査のデータを用いて分析を行いました。大崎市市民健康調査は、調査開始時点で 65 歳以上であった全住民 31,694 名を対象にアンケート調査を実施し、23,091 名から有効回答がありました。このうち、要介護認定に関する情報提供に非同意の者、追跡開始時点で要介護認定を受けていた者、追跡開始日以前に死亡または転出した者、情緒的サポートの質問に欠損がある者を除いた 13,636 名を解析対象としました。

情緒的サポートについて

情緒的サポートは、2つの質問により定義しました。情緒的サポートを受けるか否かは「あなたには、困った時の相談相手がありますか」の質問を、情緒的サポートを提供するか否かは「家族や友人の相談にのっていますか」の質問を用い、それぞれ「はい」または「いいえ」の回答としました。

他のリスク要因の影響について

本研究では、2006 年調査時に回答された年齢、性別、BMI、既往歴（脳卒中、高血圧、心筋梗塞、糖尿病、がん）、最終学歴、喫煙、飲酒、歩行時間、心理的ストレス、身体機能、認知機能、物質的サポート及び社会活動について、多変量解析による調整を行いました。

研究の特徴と限界について

本研究結果は、一般住民を対象とした大規模調査に基づいて、様々な要因（交絡因子）の影響を考慮した解析手法から得られたものです。ただし、この研究では、上述の2つの質問だけでは情緒的サポートを全般的に評価できないこと、婚姻などの社会的要因に関する情報がないために残余交絡の可能性があり、などの限界があります。